

「色彩の価値観」～古代の思想と経済の結節点としての色～

メモ)鉄本 2025.05.21

聖徳太子(厩戸皇子)の冠位十二階(冠の色彩)や天武・持統天皇の六十階服色などに見るように、それぞれの官位に特定の色彩が割り付けられており、色そのものが社会的地位を表す結果にもなっています。

それぞれの色彩には、古代の**思想的背景と経済的価値**が結びついており、この2つが交わる場所に「色」が結節点として存在しています。

1. 日本最古の色彩語

『古事記』上巻には、日本語最古の基本色彩語である「しろ、くろ、あか、あを」が記されています。

4つの色彩語は、単なる色の表現にとどまらず、古代日本人の世界観や宗教観、自然観を反映した重要な概念として用いられています。

① 「赤(あか)」

「赤」は、生命力や神聖さ、呪力を象徴する色として『古事記』に頻繁に登場します。

次のような用例があります。

- ・赤加賀智(あかかがち 上巻3)；赤加賀智(あかかがち)とは、赤い蛇のことで神聖な存在。
- ・他に、赤猪、赤海鯉魚(海鯉とは、“海たなご”のこと)、赤色楯矛、赤檣(檣は切り株のこと)、赤幡など

② 「青(あを)」

「青」は、生命の瑞々しさや成長を表す色として、『古事記』の各条に表れています。

古代の「青」は、青色だけでなく、緑や灰色など広範な色を含んでいます。

- ・青丹寸手(あをにきて 上巻3)；神事で用いる麻で織った布(幣 ぬさ)のことで神聖な場面で使用。

麻が木綿(ゆう)に比べて青みがかかっていることから「青」が使われている。⇔ 白丹寸手(しろにきて)

- ・青人草(あおひとくさ 上巻2)；人間を植物に例え、生命力や若さを象徴しています。
- ・他に、青柴垣、青雲之白肩津(河内のどこかの場所)、如青葉山者(青々とした山のような意)

③ 「白(しろ)」

「白」は、神聖さや清浄さを象徴する色として用いられています。「白」は「しろし(頭)」という語源を持ち、明確さや顕著さを意味することから、神の存在や神聖な事象を示す際に使用されます。白い動物や物も、神の使いとして特別視されることがあります。

- ・白丹寸手(しろにきて 上巻3)；穀(かじ クワ科の落葉高木)の皮の繊維で織った白布の幣帛(へいはく)

④ 「黒(くろ)」

「黒」は、暗さや死、畏怖を象徴する色として用いられています。「黒」は「暗し」という概念から派生し、太陽が沈む夕暮れや夜の闇を連想させることから、死や黄泉の国と関連づけられることもあります。

次のような用例があります。

- ・黒雷(くろいかづち 上巻2)；雷の起こる時に天地が暗黒になることの様子(黄泉国のイザナミの姿)
 - ・作黒巢橋(くろすばし 中巻3)；黒木(樹皮を残したままの丸太)を使って簾のように並べた橋の意味
- 以上の四色は、単なる色彩表現にとどまらず、古代の自然観や宗教観を反映した象徴的な意味を持っています。日本人の色彩に対する概念を次項で詳しく述べます。

『古事記』には、四色の基本色彩語以外にも色を示す語が表れますが、これらは直接的な色名として

ではなく、物質名や概念としての使用が中心であり、色彩語としての使用は限定的です。
それらは次の通りです。

- ①黄(き) 用例1:「蒲黄(ほおう) ガマの花粉の意」
『古事記』の中では、因幡の白兔が傷の治療に「蒲黄」を用いる場面があります。
「黄」という色名としての使用ではなく、物質名として登場しています。
用例2:「黄泉(よみ) 死者の国の意」 中国の「黄泉(こうせん)」に由来します。
ここでの「黄」は色を示すものではなく、地名や概念として使用されています。
- ②緑(みどり) 用例:「蘇邇杼理(そにどり) カワセミを指す古語」
カワセミの羽の美しい緑色から「緑」という色名が派生したとされています。
- ③茜(あかね) 用例:「茜色の衣」
「茜」は植物の根から得られる赤い染料で、八千矛の歌の中で「茜色の衣」が登場します。
“山県に蒔きし茜搗つき 染木が汁に染衣を”(古事記上巻)
- ④丹(に) 用例:「丹(に) 赤土や水銀を含む赤い顔料のこと」

2. 日本における色彩の思想

色彩には、古代の色彩観、宗教観、及び、中国思想などが深く関係しています。特に、「朱華(はねず)」(右図参照)が天皇の服色として最上位とされた背景には、日本古来の「太陽信仰」が背景にあります。



① 陰陽五行説と色彩 ～朱華が最上位とされた理由～

古代日本の制度や儀礼は、中国から伝わった**陰陽五行説**の影響を大きく受けています。この思想では、世界の万物は「木・火・土・金・水」の五つの要素から成り立つとし、それぞれに色が対応しています。この中で「**火・南・朱・夏＝繁栄・高貴**」という連想がなされ、「朱」や「朱華」は非常に尊い色とされました【太陽信仰との結びつき】

古代日本には、太陽神・天照大神への信仰があり、**太陽＝光＝赤・朱の色**というイメージが結びつき、天皇の色として「朱」やその一段階柔らかい色である「朱華」が選ばれたと考えられます。

五行	方向	色彩	象徴	派生語	四神
木	東	青	春・成長	青春	青龍
火	南	赤(朱)	夏・繁栄	朱夏	朱雀
土	中央	黄	中庸・統一	土用	黄龍(四神の長)
水	西	白	秋・収穫	白秋	白虎
金	北	黒(玄)	冬・鎮静	玄冬	玄武

② 視覚的な威厳と希少性

「朱華」は明るく目立つ色で、群衆の中でもひととき目を引き、**天皇の威厳や神聖性**を視覚的に際立たせる効果があります。また、朱は辰砂を加熱昇華させて得られる顔料であり、入手が困難であったため、赤系の色は非常に**高価かつ貴重**でした。これが「最上位の色」としての価値を高めることになっていました。

【参考】辰砂の語源；天然の朱の鉱物は**中国辰州産**(隋代から元初めまであった州。現在の湖南省)のものが有名だったので辰砂と呼ばれていました。

③ 制度としての「布服令(えぶくりょう)」

奈良時代の養老令(ようろうりょう)の中の「衣服令」では、身分によって着用できる色が厳密に定められており、最高位の色が「朱」や「朱華」とされました。これは色によって国家的の秩序を整えるための法制度でした。

3. 官位・地位と色彩の関係

(1) 冠位十二階及び官位六十階 ～日本の場合～

【冠位十二階】

官位等級	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
官位名称	大徳	小徳	大仁	小仁	大礼	小礼	大信	小信	大義	小義	大智	小智
色 彩												
色彩名称	濃紫	薄紫	濃青	薄青	濃赤	薄赤	濃黄	薄黄	濃白	薄白	濃黒	薄黒

【官位十六階】

官位等級	1～4	5～12	13～20	21～28	29～36	37～44	45～52	53～60
官位名称	親王明位	諸王浄位	臣下正位	臣下直位	臣下勳位	臣下務位	臣下追位	臣下進位
色 彩								
色彩名称	朱華	朱華	深紫	浅紫	深緑	浅緑	深葡萄	浅葡萄

(参考) 朱華とは; 読みは「はねず」。「はねず」(唐棣・棠棣)とは、庭梅、木蓮、庭桜の古名

(2) ヨーロッパにおける色と身分の象徴性

日本の冠位十二階のような「色による身分秩序」は、ヨーロッパでも王室・教会・貴族社会の中で存在しました。ただし、制度として厳密に「色＝位階」を体系化したものではなく、慣習、宗教的象徴、法律(贅沢禁止令)などによって色の使用が制限されていました。

以下に、ヨーロッパにおける主な色とその象徴・身分的意味を紹介します。

色彩名	象徴	由来・原料	使用者・場所
紫	皇帝、王権、神性、教皇	古代ローマ帝国では「ティリアンパープル(貝紫)」という高価な染料(貝1万個から布1枚分)を使用。	皇帝専用色。中世・ルネサンス期も王族や高位聖職者(枢機卿等)に限定。
赤	権威、殉教、情熱、戦い	コチニール(中南米産の虫由来)や茜(madder)	カトリック教会の枢機卿 貴族・軍の高官(戦いや血の象徴)
青	高貴、忠誠、聖母マリア	青の染料「インディゴ」や「ウオード(woad)」は希少で高価。 *Woadとは;ホソバタイセイ、大青の近縁種。アブラナ科の二年草。葉にインディゴを含む。	王族(特にフランス)、聖母信仰に関係する宗教美術に見られる。

ゴールド・黄	神聖、太陽、 栄光、富	安価な黄色(サフラン系)は逆にユダヤ人などの差別色として使われたこともあり、色の意味理解は要注意。	王族、教会の装飾、聖職者の典礼衣。
白	純潔、神性、 無垢	フレークホワイトと呼ばれる炭酸鉛と酸化亜鉛から成る化合物。鉛を酢で発錆させて得た鉛白が利用された。化粧にも使われた。	修道女・聖職者、または王妃や処女聖人を描いた美術作品にみられる。
黒	威厳、禁欲、 死、裁判	16世紀以降、スペイン・オランダなどでは黒が「富と威厳の象徴」とされ、洗練された色に変化した。	裁判官、修道士(特にベネディクト会)、一部の貴族。

制度的側面における色の制限 ～ヨーロッパにおける「贅沢禁止法(Sumptuary Laws)」～
中世からルネサンス期にかけて、中世的な身分秩序が崩れ始め、中世的秩序を守ろうとする動きが14～18世紀に各国で始まり以下のような法律が作られました。

- ・ 一般市民は「絹・金糸・紫色」などを着用禁止。
- ・ 特定の色や素材は、「〇〇伯爵以上」「貴族階級」「司教以上」などと制限。
- ・ 違反者には罰金・社会的非難が課せられた。

これにより、服の色が身分と直結する社会的コードになっていました。

(3)現代の世界各国の国旗に使用されている色彩ベスト10

195ヶ国中の数字

順位	色彩	国旗の数	順位	色彩	国旗の数
1	赤	150以上	6	黒	60以上
2	白	140以上	7	橙(オレンジ)	約10
3	青	110以上	8	茶	1～2(ドミニカ、ニカラグア)
4	黄(ゴールド含む)	100以上	9	紫	同上
5	緑	90以上	10	灰	1

(注) 1つの国旗に複数の色が使われているので、「国旗の数」は実際の国の数とは一致しない。

世界で最も使用される国旗の色上位3色は：赤=約75% 白=約70% 青=約50%

赤と青の2色は人間の感情・生理・宗教・社会秩序と深く結びついており、国や民族の違いを超えて意味を持ちやすい「普遍性のある色」と言えます。

(4)「赤」と「青」の象徴性の時代別比較

古今東西に拘わらず、赤と青はベースカラーであり、その象徴性は時代や地域により、

宗教 → 政治 → 情報社会と変遷し、また赤・青の二色は常に対義的に存在してきました。

時代		赤	青	備考
古代	エジプト	生命・太陽・再生	神聖・天空・保護	赤:セト神、青:ファラオの冠
	ギリシャ	戦い・怒り・情熱	神秘・知恵・冷静	赤:戦士、青:哲学者
	中国	皇帝・陽・吉祥	春・木・東の方角	五行思想
中世ヨーロッパ		キリストの贖い・殉教・戦い	聖母マリア・忠誠・加護	教会のステンドグラスに象徴
近世		革命・王権・血	王室・威厳・秩序	フランス革命
19世紀 (産業革命)		労働・労苦・社会主義	官僚制・保守・知性	政治色化 赤=左派、青=右派

20世紀前半	国威・軍事	理性・秩序	政治色化 赤＝ファシズム、青＝連合国
冷戦時代	共産主義 共産圏諸国	資本主義 西側、NATO 諸国	色分け構図：赤＝共産主義、 青＝民主主義
現代(情報社会) (21世紀)	情熱・注意・ エネルギー	安心・信頼・ テクノロジー	広告の配色戦略 赤＝感情、青＝理性

4. 色彩の経済性と社会的価値

色彩による身分制や思想体系が社会で「現実に機能」するかどうかは、物理的にその色を得ることの難易度の高さ(＝高コスト、高価)によります。つまり高価な色を身に着けることが、社会的身分の高さの象徴になり、かつ、社会秩序の規制にも繋がります。

(1) 染料の入手と色彩の階級性

- ① 高貴な色(紫・朱)は、**入手困難で染色も難しい**ため、上級階級専用である。
- ② 庶民は、**藍や草木染めによる茶・緑・灰色系**が中心だった。
- ③ 中国や南方からの輸入染料(例：蘇芳・紫根)は、希少性ゆえに**特権階級の象徴**だった。

(2) 『延喜式』に記されている色彩実現の「製法(レシピ)」

『延喜式』の「雑染用度」には、全部で39の色名が記され、それぞれに対象となる布帛・糸類とその染色に必要な物品(灰、酢、薪など)、数量が記されています。『延喜式』に定められている**染料植物**と発色の関係を示す記述を一部抜粋します。(論文から切抜き。「平安時代の染色法と色の特徴」 牛腸ヒロミ 牟田緑 塚崎舞 塩原みゆき 2021科研費)

< 赤の染色の製法表 >

染色に必要なものは、染める対象の布、染料、媒染剤(液)、水、一定の温度です。

赤色の染色						
深緋コキアケ						
綾一疋	茜大四十斤	紫草三十斤	米五升	灰三石	薪八百四十斤	
帛一疋	茜大十五斤	紫草二十三斤	米四升	灰二石	薪六百斤	
さよみ布一端	四丈	茜十六斤	紫草十四斤	米三升	灰一石五斗	薪三百六十斤
葛クズ布一端	茜大七斤	米八合	灰四斗	薪九十斤	紫草七斤	
浅緋アサアケ						
綾一疋	綿紬	東紬	紬布亦同	茜大三十斤	米五合	灰二石 薪三百六十斤
帛一疋	茜大十五斤	米四升	灰二石	薪三百六十斤		
葛布一端	茜大十斤	米一升	灰四斗	薪九十斤		

出典:(抜粋) 論文「平安時代の染色法と色の特徴」 牛腸ヒロミ 牟田緑 塚崎舞 塩原みゆき

【注釈】 深緋(こきあけ)＝紫がかかった濃く鮮やかな赤、茜と紫草の2つの染料を合わせる。

浅緋(あさあけ)＝薄い目の赤、茜のみで染色する。

綾＝経糸・緯糸で編んだ絹 帛＝絹布 さよみ布＝細い麻糸で紡いだ織目の細かい上質の布 葛クズ布＝緯糸にクズの繊維を用いた布

灰の役割：灰はアルカリ性で媒染剤の役割で、発色は青味を帯びる。

米の役割：酢を入れると赤味が増す。米から酢を作ることが想定される。

薪の役割：温度を上げることにより、濃い色が得られる。

5. 植物性染料による染色

- ①「**摺染**(すりぞめ)」: 染色の起源となる方法です。草木の葉っぱや花などを布に摺り付けて染めます。
- ②「**浸染**(しんせん)」: 4世紀頃に中国から伝わった染色技術です。草花から染料を抽出し、これを染め液として、布を浸して染める方法です。
- ③「**捺染**(なっせん)」: 色糊で布地に文様を印刷する方法。後のスクリーン印刷技術に発展します。実際の染色作業では、染料に対して、灰汁(アルカリ物質)と酢(酸性物質)を調合して、発色の強弱を調整します。紫草を使った例では、アルカリが強いと紫傾向に、酸性が強くと赤傾向になります。

植物名	性質	発色・着色料の取得法	備考
①紅花 (べにばな)	キク科の二年草。鋭いトゲがある。原産地はエチオピアで日本には飛鳥時代以前に渡来。	灰汁に浸すと紅色色素が滲出、酢を加えると紅色色素が沈殿する。	入手容易 後媒染
②蘇芳 (すおう)	アジア南部産のマメ科の小高木。飛鳥時代から輸入され、貴重なもの。	幹を切り碎いて灰汁や明礬で媒染。紫色が得られる。	入手困難 後媒染
③日本茜 (にほんあかね)	アカネ科の多年草。山野に自生するつる草。日本(北海道除く)、朝鮮半島、台湾に分布する。	根に赤色系色素が含まれ奈良時代から染色に利用された。	入手容易 先媒染
④紫草 (むらさきくさ)	ムラサキ科の多年草。日本、朝鮮半島、中国に野生する。天平時代には各地で栽培された。	根を採って乾かすと紫黒色となり、紫色の染料として使用された。	入手やや困難 先媒染
⑤梔子 (くちなし)	アカネ科の常緑低木。静岡県以西の日本、中国、インドシナの温帯、亜熱帯に分布。	完熟した黄赤色の果実を乾燥させて染料とする。飛鳥時代から食品の着色料としても利用。	入手容易 後媒染
⑥荊安 (かりやす)	イネ科の多年草。日本各地の山地や草原に自生。茎や葉を乾燥させて黄色の染料を得る。	夏から秋にかけて全草を刈り、細断して煎じ汁を黄の染料とする。	入手容易 後媒染
⑦藍 (あい)	タデ科の一年草。東南アジア原産。飛鳥時代に中国経由で渡来。京都、大阪近郊が主産地。	葉から抽出した染料液を発酵させて、濃青色の染料インディゴを採る。	入手やや困難 還元染色
⑧檜 (はぜ)	ウルシ科の落葉高木。中国、インドシナ原産。北海道を除く暖地の山地に野生する。古名はハジ。	実から木蠟を採る。樹皮は染料になる。蘇芳と重ね染めし黄褐色を得る。	入手容易 後媒染
⑨黄檗 (おうばく)	キハダのことで、ミカン科の落葉高木。北海道から九州、朝鮮、アムール地方に分布。	幹の内皮を細断し熱湯で煎じた汁を染色利用。黄肌染になる。	入手やや困難 無媒染可
⑩椴 (くぬぎ)	ブナ科の落葉高木。本州以南、朝鮮半島、中国、ネパールの温帯地に分布。古名はツルバミ。	秋に熟した実(オカメドングリ)を煎じた汁を染色に用いた。	入手容易 後媒染

【用語説明】

- ・先媒染とは; 染色する布を先に媒染液(灰汁など)に漬けた後に染料液に浸すこと。
- ・後媒染とは; 染色する布を染料液に浸した後、媒染液(灰汁など)を加えること。
- ・還元染色とは; 色素の元がアルカリ性水溶液で還元し水溶性となり、繊維に染まるように染料を水溶液の形に変化させ布に染料を吸着させる方法。

6. 鉱物性顔料・動物性顔料による染色

無機顔料の変遷は、3つのフェーズに分けられる。①縄文・弥生時代は「赤と黒の時代」(朱、黒っぽい色、弥生後期には緑も出現)、②古墳時代は「土性顔料の時代」(白、黄も出現)、③飛鳥時代以降は多彩な「鉱物性顔料の時代」(鉛丹、鉛白、青、金、銀が出現)。平安期以降は多様な草木染が増加します。

無機顔料は、一般的に不溶性ですから、鉱物性の粉末(朱・群青など)を糊と混ぜて、装飾用の衣や幕などに顔料を「摺り染め(すりぞめ)」や「引き染め」といった技法で使用します。

(注)「引き染め」とは; 引染とは、日本の伝統的な本染のひとつで、白く残したい部分に糊や型などを置き、色ごとに刷毛を使い分けて綿生地に一点一点染色していく技法のこと。

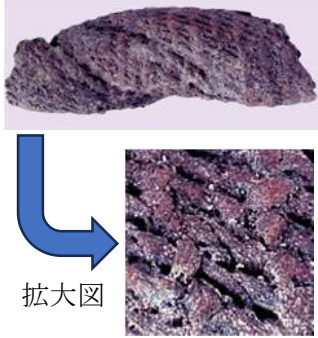
鉱物名	性質	発色・着色料の取得法	備考
①辰砂 (しんしゃ)	水銀と硫黄の化合物による赤色顔料。古代の産地は、三重県丹生鉱山、徳島県水井鉱山、大和水銀鉱山など	辰砂を石臼・石杵を使い粉碎し粉末化。 辰砂の色は唐紅色	入手困難 赤系
②弁柄 (べんがら)	Fe ₂ O ₃ (酸化第二鉄)が主要の赤褐色顔料。主に濃尾平野(大垣市金生山付近)で生産された。	黒色酸化鉄或いは黄色酸化鉄の熱分解によって入手。パレススタイル土器に見られる。 代表例:高松塚古墳	入手やや困難 赤系
③鉛丹 (えんたん)	Pb ₃ O ₄ (四三酸化鉛)を主成分とする赤橙色顔料。一酸化鉛分が多いと黄みが強くなり、四三酸化鉛分が多いと赤みが増す。	金属鉛を加熱・酸化させ一酸化鉛とし、さらに加熱して四三酸化鉛とする。 代表例:法隆寺金堂壁画	入手困難 赤系
④黄土 (おうど)	水酸化第二鉄を主成分とする淡黄色のシルト質。中国から飛来する黄土の風成堆積物が西日本に見られる。	顔料として使用される黄土はイエロー・オーカー又はオーカーと呼ばれる。黄土粉末を十分に分散させるように水系に溶解攪拌する。	容易 黄系
⑤ラピスラズリ	方ソーダ石の仲間。七宝の1つとして古来珍重される。瑠璃とも呼ぶ。アフガニスタン産が古来有名。	粉末にして油と混ぜて、岩絵の具(群青)として使用。	入手困難 青系
⑥貝紫 (イボニシ貝、ボラ貝などの巻貝)	アキガイ科の貝の鰓下腺(サイカセン)から分泌される粘液が酸化された状態で紫色となる。貝1万個から採れる量は僅か1.5g。	染色に使用する貝のパープル腺を集め、すりつぶして水に溶かし染料液とする。布を染料液に浸した後、日光(紫外線)に当てると発色(紫)する。	入手困難 紫系
⑦緑土 (セラドナイト、海緑石)	セラドナイトの集合体は、火山から噴出した火山灰や溶岩が変質したもの(雲母粘土鉱物)です。産地は島根県。	最古出土例は、弥生時代後期の木製盾の彩色(鳥取県青谷上寺地遺跡)	入手容易 緑系
⑧白土 (カオリン)	長石の風化による粘土。カオリナイト(含水珪酸アルミニウム)を主成分とする粘土鉱物の他にケイ素やアルミニウムを主成分とする白色顔料も含む。	水に難溶。最古例は、九州南部の縄文後期の台付土器に白色塗彩されている例。白土は主に彩色の下地材として使われ、現在に至る。	入手容易 白系

⑨マンガン土	金属マンガンが酸化すると真っ黒な二酸化マンガンとなる。	最古例は、福島県縄文晩期の精製土器の例。	入手容易 黒系
⑩木炭粉/竹炭	入手はひじょうに容易	炭を細かな粉末にして、	入手容易 系

7. 染色された繊維類の出土品の例

染料技術は、5項で述べたように「摺染」から始まり、4世紀頃に新しい技術「浸染」が行われるようになりました。

(1) 縄文時代から弥生時代の染色編物・織物の出土例（出土物に色が残っていることはまれ）

時代	遺跡名	素材	織り方	写真・色・染色方法	備考
縄文時代後期	米泉(よないずみ)遺跡 (金沢市) 縄文時代の布が出土した遺跡は全国で13例のみ。	赤麻 (あかそ) の繊維	編布 (アンギン様編布)	 拡大図	漆濾しに使用 (漆が付着) 染色は不明
縄文時代晩期	柏木川4遺跡土坑墓 (北海道恵庭市南島松) 織物は泥炭層から出土した。 出典: 恵庭市郷土資料館	イラクサ科植物 	縦り編 (ねじりあみ) → 下図参照		繊維製品が48点出土。 大きさが125×60 cmと縄文時代最大の布製品。 染色は不明
弥生時代前期	吉野ヶ里遺跡 (佐賀県) 甕棺墓出土 出典: 吉野ヶ里 HP より	絹 日本製 (家蚕)	平織 透目	染料= 日本茜と貝紫の染色 色彩= 赤と紫 	麻布の出土有 繊維が甕棺の中にあっただので、比較的的色彩がよく残っています。
弥生時代中期	王子ノ台遺跡 (神奈川県平塚市 東海大学敷地内) 方形周溝墓出土 「編みと織りの考古学」より 東海大学校地内調査団 2007	不明	平織	染料、色彩は不明 	鉄剣を包んでいた織布で鉄剣に付着していた。

(2) 時代ごとの染色技術の拡がり概観(出土例を中心に)

【縄文時代】 生成りの時代？

① 編物・織物の出土が非常に限られる

→ 繊維製品は腐敗しやすく、保存状態が非常に特殊な場合にしか残りません。

② 植物繊維を使った編み物(網やカゴ状のもの)は出土

→ 三内丸山遺跡(青森)などからは、編み目模様のついた土器や植物繊維製の網状遺物(編布)が確認されています。しかし、色素の残留がほとんどなく、染色されたと明確に言える遺物は発見されていません。

【弥生時代】 染色の嚆矢

① 織物の実物出土が始まる(例: 土器に焼き付いた織物痕)

→ 板付遺跡や吉野ヶ里遺跡などで織物の痕跡(織り目)が確認されており、「拵(かすり)」のような技法がすでに存在したという説もあります。

② 染色の可能性はあるが、間接的な証拠のみ

→ 染料植物(茜、藍、梔子など)の利用はこの頃からと推定されています。染色布の出土は希少。

【古墳時代】 染色技術の定着

① 布地の出土例が増加(湿潤な古墳内などで保存されている)

→ 藤ノ木古墳などから、絹織物や麻織物の断片が出土。染色の証拠も明確になっています。

→ 科学分析によって、弁柄、藍、梔子などの使用が判明しています。

【飛鳥時代】 染色技術の拡大

① 染色・織物の技術が飛躍的に発展

→ 中国や朝鮮半島からの技術移入が進み、絹織物・染色技法(草木染・文様染)が普及。

→ 法隆寺献納宝物などに見られる文様織や絞り染め、型染め。

8. まとめ

(1) 思想的・象徴的価値(表面の意味)

「色に込められた意味」: 宗教・哲学・道教的な色彩観による制度上の色のランク付

紫 → 神聖・高貴(日本では高德/ヨーロッパでは皇帝・教皇)

赤 → 生命・太陽・戦い 白 → 純粋・無垢

青 → 浄化・誠実・聖母 黒 → 権威・沈黙・死

(2) 経済的・技術的価値(裏の現実)

◆ 紫(最上位に位置付けられることが多い)

日本: 紫草(ムラサキ)の根からごく少量しか染料が得られず、発色・保存が難しい。

ヨーロッパ・ローマ帝国: ティリアンパープルは膨大な数の貝が必要のため黄金より高価。

よって、制度的に「高貴な色」とされた。

赤(朱・蘇芳など)

日本: 蘇芳(すおう)は東南アジア産の輸入品、従って、交易品としての価値が高い。

ヨーロッパ: コチニール(中南米の虫)はスペイン植民地からの貴重な輸入品。

よって、輸入経路を握る国家・階級ほど、この色を「独占」した。

青(藍)

日本:タデ藍は比較的自給可能だが、藍建て(発酵技術)には高度な技術が必要。

ヨーロッパ:中世では「ウオード」植物由来で染めるが、17世紀以降インディゴ(インド産)が主流となり極めて高価だった。

● 黄(金色)

日本:梔子、黄檗、サフランなどから得る。サフランは特に高価。

ヨーロッパ: サフランは香料・薬にも使われた。

黄金色は視覚的にも「高貴さ=富」と直結した。

【参考文献】

- ・論文「衣裳を彩る色材の分析」文化財情報学研究 第14号53 下山 進・下山 裕子・大下 浩司
- ・論文「飛鳥・奈良時代における紫色の特質」万葉古代学研究年報 第12号(2014年3月) 小倉久美子
- ・論文「平安時代の染色法と色の特徴」科研費研究 2021
実践女子大学 教授牛腸ヒロミ 准教授牟田緑 塚崎舞 塩原みゆき
- ・『日本の伝統色』「先史から奈良時代にかけての色」日本色彩研究所編 福田邦夫 読売新聞社 1987
- ・『すぐわかる日本の伝統色』東京美術 福田邦夫 2005
- ・寄稿「顔料の歴史」絵具講座Ⅱ 2002 鶴田榮一
- ・『日本民族文化大系3 稲と鉄』「水銀」—民族と製造技術— 市毛勲著 小学館 1987
- ・論文「装飾古墳の色料について」文化庁装飾古墳ワーキング・グループ 2014
- ・HP 日本人の美の心！日本の色【伝統色のいろは】(irocore.com)
- ・調査報告書『緑土塗布の木製盾復原製作』鳥取県埋蔵文化財センター 2013
- ・HP 日本茜(ニホンアカネ)の染色実験
[日本茜\(ニホンアカネ\)の染色実験 ~生と乾燥の比較実験 - 草木染めの天然色工房 tezomeya](#)
- ・HP 延喜式
[デジタル延喜式 Engi shiki Database - デジタル延喜式 Engi shiki Database](#)
- ・HP 貝紫染のメカニズム
[貝紫\(かいむらさき\)って知っていますか? | 京都光華女子大学 短期大学部 ライフデザイン学科](#)

以上